

学級委員長委員会委員長って言いにくいね

つくらん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

6年は組、学級委員長委員会委員長、衣笠青葉。

猫好きで、肉球に埋もれて、仕事をサボってることも。

いつもなにか悪巧みをして人を困らせているので、『黒幕は青葉』という言葉も出てくるほど。

ところで、学級委員長委員会委員長って、言いにくくないですか？

目次

組別対抗 木像奪取&死守擬似合戦

1話	始まりの法螺貝の段	1
2話	同盟結成の段	8
3話	作戦開始の段	12
4話	ワナワナパニックの段	15
5話	攻め時の段	19
6話	試合終了の段	24
5年と姫守り		
1話	帰宅と出発の段	30
2話	下調べの段	35
3話	最終確認の段	39
4話	遭遇の段	43
5話	任務完了の段	47
6話	目的はの段	51
短編		
	油断厳禁の段	54
	要は言葉の使い方よの段	60

組別対抗 木像奪取&死守擬似合戦 1話 始まりの法螺貝の段

法螺貝の音が、森に木霊する。

「おつ始まったねえ」

いつものようにゆるく笑う深緑の忍術学園六年生の忍者服を着た男は、立ち上がった。

「じゃあ、留三郎。しばらく任せよ。戻らない時は、伊作が司令塔で」

「おう。気をつけろよ」

「わかった」

そういつて、男は“は”と書かれた旗が掲げられる本陣から外に出た。

「さて、僕らも行くか」

「「はい！」」

藤色の忍者服、つまり四年生のタカ丸の言葉に、しんべエ、庄左エ門が元氣よく返事をした。

同時刻、“い”と書かれた旗が掲げられる場所では、文次郎が腕を組んで立っていた。

「僕ら、優秀ない組がは組に負けるはずがない」

「バカタレ。三病を忘れるな」

一年の伝七と佐吉が、いつものようには組を馬鹿にしていれば、文次郎にゲンコツを落とされた。

忍者にとって、敵を侮めることは任務失敗にも繋がりがねない危険な行為だ。

「なにより、青葉が何を仕掛けてくるか……」

学級委員長委員会委員長である衣笠青葉。作戦は、おそらく青葉が中心に考えているはずだ。成績の悪い生徒が集まるは組とはいえ、六年にもなれば実力の差はそうない。誰もがなにかしらの特技を持ち

合わせている。そして、その特技に合わせて鍛錬している者が多く、たとえ特技がひとつだけだとしても侮ってはいては、足元をすくわれる。

「特に今回は実戦だ。一年は組は、テストはひどいが実戦には強い。注意しておいて損はない」

「は、はい。すみません……」

コツンと、警戒線が切られたことを知らせる音が響いてきた。

「ろ」と書かれた旗が掲げられる場所では、七松小平太がいつもどおりの元気良く叫んでいた。

「いけいけどんどーん!!」

「ある意味、このチーム真正面から対決になったら強いよな……」

「だね……」

五年の八左エ門と雷蔵が、今にも飛び出していきそうな小平太を見ながら、苦笑いをこぼす。

忍術学園で何か行う時に、指揮を取るような上級生は、このチームにはいないが、単純な攻撃となれば話は別だ。むしろ、いつも矢面に立って戦っている体育委員会委員長がいる。それに、潜入のエキスパートもいる。

「まずは、敵陣地の場所を確認したいところだが……」

三郎が嫌な予感を感じつつ、三年へと目を向ければ、案の定、一人しか見当たらない。

「す、すみません!!!」

「とりあえず、作兵衛は二人を捜索してくれ……あの二人、結構迷いながら敵を見つけることが多いし」

「は、はいー!」

作兵衛が慌てて切れた縄を取り替えて、迷子を探しに森の方へ走っていった。

事の起こりは、数刻前。やはり、学園長の突然の思いつきだった。より実戦に近い戦いを行おうと、

「これより、組別対抗木像奪取アーンド死守擬似合戦を行う！」
と、言い出したのだ。

ルールは、

- 一、チームは縦割りとする。
- 二、それぞれのチームに木像をひとつずつ配布する。
- 三、日の入りまでに最も多くの木像が、本陣にあるチームを優勝とする。（同数がいた場合、優勝者無し）
- 四、命の危険になる道具は使用しないこと。火縄銃や石火矢も使用を可とするが、実弾は使わないこと。
- 五、本陣は、それぞれの旗から直径十尺の距離とする。
- 六、開始、終了の合図は、法螺貝とする。
- 七、罨の類は、開始半刻前から作ることを許可する。
- 八、優勝したチームには、長期休みを二日延長する。
- 九、みんなで楽しくやりましょう。

と、発表された。

もちろん、最初はどこも一体ずつで、優勝するならば、別の組から木像を奪い取る必要がある、それを日の入りまで奪い返されないようにしなければならぬ。

ひとつのチームから奪えば、奪われたチームから狙われるのはもちろんのこと、奪われていないチームからも同時に二つを奪うチャンスと集中的に狙われる。タイミングと情報は重要な要素だった。

「さて、どうしたものか……」

作戦会議時間と設けられた時間。は組は、悩む青葉の周りを囲うように座っていた。

すでにこの時から情報集めは始まっており、この部屋には、下級生しかいなかった。他は、周囲の警戒と情報収集中だ。

「は組だけだと、五年生がキャラ設定されていませんからね」

「庄ちゃんってば冷静ね。というか、メタいね」

同じ学級委員長委員会の庄左エ門が、そんなことを言ってしまう

が、実際、それは青葉も悩みどころだった。

五年生に、は組はいない。四年には斎藤タカ丸の一人だけ。六年には二人、自分を含め三人いるが、他の組に比べて、やはり下級生の比率が高い。

「先輩。これが、木像ですか？」

「そうだよ」

一年生がそれを見ていると、襖が開き、全員が目がその人へ向く。入ってきたのはタカ丸だった。

「ごめん……見つかっちゃった」

タカ丸には、い組の偵察に行ってもらっていた。もちろん、あまり成功するとは思っていない。相手が相手だ。それはどこも同じだろう。忍者ならば、情報を与えず、自らは情報を得る。もしくは、間違った情報を敵へ流す。

さすがに忍者の学校で警戒されている中、重要な情報を与えるような失敗をするような人はいない。

「お疲れさま。続けてで悪いけど、留さんと見張り交代してきてくれる？」

「うん。わかった」

すぐに戻ってきた留三郎に、下級生たちが見ていた木像を取り上げると、それを渡す。

「できる限り精巧に、同じものを作るのできる？」

「まあ、ある程度はできるが、時間もねえし……あんま期待はしないでくれよ？」

「うん。一時的に騙せれば十分」

さすがの一年でも、偽物を作る意味は分かったようで、目を輝かせていた。

「偽物を作つて騙すんですね！」

「本陣に置いておくのは偽物で、盗まれないようにするってことですか？」

「半分正解。半分はずれ」

そう言うと、嬉しそうに喜ぶ一年生に首をかしげると、三年の数馬

が呆れたようにため息をついた。

「二年は組のテストって、いつも視力検査みたいな点数ですから……半分ってことは、五十点ってことで……」

「あーそれは喜ぶね。狂乱してもいいレベル。みんな、拍手しておく？」

「結構です。それより、残り半分というのは？」

相変わらず冷静な庄左エ門のおかげで、逸れていた話が戻ってきた。青葉と留三郎は、拍手しようとして構えていた手を困ったように見つめたあとと降ろし、話を続けた。

「本陣に置いておくのは本物。偽物は、交渉に使う」

「えっと……？」

「どういうこと？」

「しんべエ。目が離れてる」

乱太郎たちが、しんべエの目を近づけようと押す中、青葉は気にせず話を進める。

「協力を持ちかけようと思う」

「協力？」

「さすがに、ふたつの組に一斉に狙われるのは大いに困る。というか、防ぎようがない」

「確かに……」

ひとつは成績優秀な、い組。もうひとつは、体育委員会委員長が率いる、ろ組。このふたつに一斉に襲われると考えたら、恐ろしいことこのうえない。

「だから、ひとつと同盟を結んで、絶対的不利な状況を作らないようにする」

「そのための、偽物^{ゴレ}ってことか？」

「そう。同盟とはいっても、チームは三つ。そのうちのひとつを潰しても、どうやって配当するかって揉めるし、その後のことも揉めることになる。向こうだってそれは分かりきってるわけだし、メリットが無ければ乗らないでしょ？」

「まあな」

「……えっと、どういうこと?」

一年生の視線が、自然と庄左エ門に集まっていた。しかし、答えは三年の浦風藤内から返ってきた。

「それって、偽物を相手に渡して、代わりに協力してくれ。それで奪い取ったら、木像を僕たちがもらうって言って、同盟を結ぶってことですか?」

「そういうことです。さすが、三年生」

一年生に理解ができたかと確認すれば、しんべエの目が相変わらず離れたまま。

「藤内。復習ついでに、一年生に説明してあげて」

「は、はい!」

留三郎が心配する中、藤内と数馬による作戦の概要の説明が始まった。さすがに、二年の四郎兵衛は概要自体は理解しており、少し青葉と留三郎に目を向けていれば、なにやら二人は目を合わせて微妙に口を動かしていた。

「つまり交渉が成立したら……私たちは、本物を隠し持ってるわけで」

「日の入りまで隠しきれば、は組には木像が二つで」

「他はゼロかひとつ……つまり」

「は組の勝利!」

嬉しそうに声を上げた一年生と、疲れたようにうなだれる三年生に青葉と留三郎も視線を戻すと、普段の土井先生の苦勞を考えて苦笑になってしまった。

「でも、そんなにうまくいくんすか?」

きり丸の言うとおり、理論的には簡単そうだが、現実には難しい。相手だつてすぐに思いつくような作戦だ。警戒するのは当たり前。

「そこは、まあ、俺の腕の見せ所。として……もうひとつ、これに乗る条件がある」

「条件?」

「鉄壁の防御力があること」

木像をふたつ所持するというのは、は組も知っていて、それを木像が奪われた組に話せば、奪い返しにくるはずだ。

加えて、優勝するためには、どうやってもふたつは手に入れなければいけないのだから、この作戦に乗るのは、そこまで踏まえた上で、日の入りまで木像を守りきれ防衛力を持っている組。

「さて、そんな戦闘力がある組は？」

数秒考え、全員が出した答えは、同じだった。

「つまり、最初に狙われるのは、我々い組の可能性が高いということですねか!？」

い組の作戦会議では、上級生が話す言葉に、伝七が声を上げた。

「ああ。ろ組には、攻撃なら小平太、守りなら三木工門がいる。潜入なら、鉢屋の奴が大得意だしな」

「それに、さつき偵察にきたのが斎藤だったのも大きい。おそらくは、留三郎か伊作がろ組に偵察に行っている。密書を運ばれている可能性も考えるべきだろう」

仙蔵の言葉に、その場にいた全員が眉をひそめた。天才トラパーと呼ばれる綾部喜八郎がいるとはいえ、二つの組から同時に狙われるのはやはり厳しいものがある。どうにか打開したいところだ。

仙蔵が頭を悩ませる中、ろ組へ偵察に行かせていた久々知兵助が部屋へ飛び込んできた。

「ろ、ろ組の作戦会議室に、小松田さんが運んでた槍が降り注ぎました……!!!」

全員が、偵察に行ったのが伊作だと、確信した瞬間だった。

2話 同盟結成の段

警戒線が張られたすぐ近くで、仙蔵はワザと警戒線に引っかかった青葉と話をしていた。

「まあ、伊作は偽の密書を持っていたかどうかはさて置き、アレはただの鉢屋への嫌がらせだろ？」

仙蔵がにこやかな笑みで、学年関係なく、は組全員の魂が抜けそうになるほど驚かせたことをあつさりと言い当てた。少し似た者同士なのだろう。考えることが似ている。

「それにこの作戦、重大な欠陥がある」

青葉の目が少し警戒の色を帯びる。

「先に言っておく。『あえて』文次郎ではなく、私が交渉に出てきたんだ」

「……仙ちゃんってば」

青葉の表情が少しこわばった。ろ組との手を組む作戦は、確かにうまくいけばそれは強いだろう。しかし、この作戦、最初のこの交渉が一番の鍵となる。これがうまくいかなければ、作戦は続行不可能。は組に勝ち目はない。

だというのに、ろ組で交渉に出てくるのは、小平太ではなく図書委員会委員長の中在家長次だ。偽物の木像を見分ける目は、持っている。そして、目の前にいる仙蔵も。

「本物を渡さない限り、手は組まない。だが、まあ、本物なら手を組んでもいい。は組は実戦に強いしな」

「……………」

それほど長い間ではないが、頭の中で天秤にかける。いくら一年は組が実戦に強いとはいえ、上級生が多くなれば、まず勝てない。

「……今後、お前に連絡がある時はしんべエと喜三太を仲介にいらてやる」

「なっ……!?」

呪いの文言と共に、懐から本物の木像を取り出した。仙蔵は恐ろしすぎる言葉に、先程までの澄ました笑顔は崩れさったが、どうにかひ

きつった笑顔を作りつつ差し出された木像を掴む。

「確かに本物のようだな。なら、は組と協力しよう。ただし！ 福富しんべエと山村喜三太は私のそばに近づけるな！」

「遠慮するなよ。仙ちゃんにお便り届けてくれる、かわいい後輩じゃないか。邪険にするなよ」

わかりやすい二人の作り笑顔は、互いに頬がひきつり合っていた。

「来ないな」

「……もそもそ」

「すでにい組と接触して、手を組んだ可能性がある。すぐに、攻撃を仕掛けてくる。作戦梅でいこう」

声の小さい長次の代わりに、雷蔵が同時通訳すれば、一年生が小さく悲鳴を上げ、同じように嬉しそうに声を上げる四年生が一人。

「籠城戦！」

「すごいスリル〜」

「うおおお！ 今度こそ最後まで守りきってやるー！」

籠城と聞いた途端、テンションが上がる守一郎に、八左エ門が驚いたように目を向ければ、同級生である三木エ門が苦笑いをこぼす。

「元ホドホド忍者の子孫ですから……」

「あ、そういえば……」

籠城ができるという理由で、タソガレドキと一度は手を組むほどの籠城好きだった。

「……」

「三郎？」

じつと森の方を見つめる三郎に、雷蔵が話しかければ、森を探るように見つめたまま、

「見つかったな」

三郎の言葉に、全員が一斉に三郎を見た。

「たぶん、しんべエだ。はつきりと見えたわけじゃないが、少し気配がした」

は組にろ組の陣地の場所がバレた。それは、手を結んでいるであろうい組にもバレたという意味で、ろ組には不利な状況を示していた。

しんべエ、庄左エ門、タカ丸が帰ってくると、すでに青葉も帰ってきていた。

「おかえり。交渉はうまくいったから、ろ組の木像奪うまでは、い組と共闘するよ。そっちは？」

「鉢屋先輩が警戒してたみたいで、近づけなかったんですが、だいたいの場所はしんべエが」

ろ組には、過激な武器を扱う三木エ門がいるため、どうしても火薬はある程度の量が必要となる。そうなれば、火薬独特の臭いが陣地からする。しんべエの鼻ならそれを見つけることができる。

「も、もう歩けない……」

「しんべエ！ これからが大事なんだよ」

倒れ込んでしまったしんべエに、庄左エ門が慌てて起こそうとするが、重くて持ち上がらない。

「あー……とりあえず、攻めは二年以上でやるから、一年は兵太夫以外は陣地の守護。三治郎、三人にカラクリのこと説明しておいてね」

「はい」

「さーて、留三郎」

「おう！ 任せとけ」

すぐにい組にも、ろ組の陣地の場所は知らされた。

「それで、作戦は……」

「文次郎、留三郎の二人で、小平太と長次をできるかぎり陣から離れた場所へ誘導し、足止めをする。おそらく長次は出てこないだろうが、五年の誰かが出てきたらラッキー程度だ。い組、は組、その中間の三方向から、ろ組を攻めて戦力を前に向けさせる。その間に、私が大回りして、裏からろ組の陣地へ侵入し、木像を奪取する。という作戦だ」

い組はすでにふたつの木像を手に入れており、無理してもうひとつを奪う必要はないが、念の為だ。ここで、裏切って、は組がろ組を手を結ばれるよりは、多少の犠牲を払っても乗っかっておいたほうがいい。

もちろん、出す戦力は削る。こちらの守備の方が嚴重にするべきだ。

「というわけで……い組側から攻撃を仕掛けるのは、一年だ」

「ええええ!」

「安心しろ。戦果なんて全く期待していない」

「は、ハッキリ言いますよ……」

伝七が頬をひきつらせるものの、仙蔵はじつと伝七を見たあと、笑顔で肩を掴んだ。

「伝七は特別に、喜八郎と一緒に任務に当たってもらおう。息を合わせる必要があるものだが、同じ作法委員会だ。やれるな?」

「あ、綾部先輩と……?」

何故か、すごく嫌な予感がするが、頷く以外のことか許されていなかった。後ろで佐吉が、久々知平助から焙烙火矢を受け取っていた。

「誰かがいたら、とにかくこれを投げて、あとは全速力で戻ってくればいい。ここは俺たちが守ってるからな」

「わ、わかりました!」

仙蔵の視線が今度は、二年生に向いた。その妙な笑顔に、全員が小さく悲鳴を上げた。

3話 作戦開始の段

「かわいいそうに……生贄に選ばれちゃったかあ……」

「先輩に言われたくないです!!」

森の中で笑顔でそんなことをいう青葉に、久作と三郎次はつい叫んでしまった。

場所は、い組とは組の陣地のちょうど中央あたり。ここから、ろ組へ攻撃を仕掛けるのは、い組とは組の複合チームだ。

「青葉はおそらくそこにくる。本来なら、作戦を自分の陣から見守るのがあいつのスタイルだが、は組は上級生が少ないからな。必然的に青葉も出てくることになる。なので、お前たちは途中で撒かれる」

それはもう断定だった。確かに、六年に本気で逃げられたら、二年では追いつけるわけがない。つまり、ろ組の陣へ入って戦いとなった場合、まず見捨てられる。まさに生贄。

左近は保険委員ということで、珍しく運良くその役目から外された。

「安心してよーちゃんと言までは一緒に行くから」

「見捨てる気満々じゃないですか!」

「ま、まあ、一種の死間ってことだろ……」

今後のことを考えれば、ここに配置されるのは、それほど重要な戦力じゃない人間。つまり、低学年になる。

「まあ、本当に死ぬってわけじゃないから。第一、これチーム戦だから、別にチームが勝ってくれば勝ちだからさ。そんなに落胆しないで」

忍者は自分の命すら道具にすることがある。それが、城の勝ちへと繋がったなら、それは忍者にとつて負けではない。それはわかっているし、青葉の言っていることは、間違っではないなかつたが、

「はつきり俺たち見捨てるって言ってるようなもんだよな……」

忍者は非常に非情な生き物なのである。

ろ組の陣地があるだろう場所までは、もうしばらくあると少々油断していた時だ。突然、少し行ったところで激しく音を立てながら爆発

が起きた。しかも、一発ではなく、不規則に間を開けながら三発。「うわああッ!？」

三人はすぐさま身を隠し、そちらを見つめるが、何もいない。「み、見つかったってことでしょうか?」

「牽制だね。今の音で戦ってるって思わせて、この辺から向かってくる相手を回り道させようとしてるんだろうね。何故だと思う?」

「できる限り敵が攻めてくる方向を減らしたいからですよね?」

「それで、攻めてくるであろう方向にしっかりと守りを……」

そこまでいって、ろ組の守りの要を思い出して、二人が顔を青くした。

「はい!!」

その音は、は組の陣営にも聞こえていた。

「い、今の音なに!？」

「どこかで戦いが始まったんだ! しんべエ! そろそろ起きろ!」

きり丸がしんべエを起こすと、残っていた、は組は周りの森を睨むように警戒し始める。

「一年生、張り切ってますね」

「集中持ってくればいいけど……」

少し離れた場所から、保険委員である伊作と数馬が、一年の様子を気楽に眺めていた。

そのは組の陣地のそばで、罨のサインに気がついた左之助が足を止める。直後、現れた左門も左之助を見つけると、足を止めた。

「左之助! お前も迷子か?」

「お前と一緒にするなよ。左門。それより、罨のサイン置いてあるから、この辺気を付けたほうがいいぞ」

「それなら俺もさつき見つけた! でも、ろ組で決めたサインじゃないよな?」

「ってことは……」

「ろ組」

「は組の陣地だ!!」

二人にゲンコツを落としながら現れたのは、法螺貝が鳴ってから二人を探し続けていた作兵衛だった。

どの組にも、陣地のおおよその方向だけは教えられているため、自分のいる位置さえ分かれば、自分の陣地からどの組の陣地かわかるようになっていいるのだが、この方向音痴たちではわかるはずもなかった。

「つーか、ホントに見つけたよ……こいつら……」

半分賭けではあったが、本当には組の陣地を見つけたのだから、たまには方向音痴も役に立つ。

三人が罫を見つけた位置から、おおよその陣地の場所は予想がつく。

「どうする？ 乗り込むか？」

「は組って、基本的に一年だけだろ？ さっき向こうで戦闘音したし、上級生が一人くらいなら誰か囷になればいけるんじゃないか？」

「おめーら、最初からいなかっただから……」

作戦が梅になったことを、この二人は知らないのだ。しかたなく、作兵衛がそのことを伝えれば、二人共すぐに先程の音について納得した。

「つてことは、すぐに戻ってここの情報を伝えつつ、は組の攻撃を止めたほうがいいかもな」

まさか後ろから攻撃されるとは思っていないだろう。作兵衛も左之助の意見には賛成だったが、疑念がひとつ。

時間が勝負のこの状況で、この二人をしっかりと引っ張って陣地まで帰る方がいいか、それとも二人はここで待機させて自分だけ走って戻ったほうが早いかな。

前者であれば、時間はかかるが、は組の攻撃に上級生が混ざっていてもなんとかなるかもしれない。後者なら、時間は掛からないが、上級生が混ざっていた場合、どうにもならない。

「……戻るか。とりあえず、縄はちゃんと結べ！」

前者を取った。

4話 ワナワナパニックの段

音が遠くなつたのと確認すると、妖士丸がそつと草むらから顔を出して、周りを確認する。

「大丈夫みたい」

「ほ、本当？」

平太も顔を出すと、安心したように息をつく。

「コラコラ……安心してないで、俺たちの仕事をするぞ」

別の場所から顔を出した八左エ門に、小さな声で返事をする、三人は注意しながらい組の陣地のある方角へ足を向けた。

ろ組はどここの陣地の場所も把握していない。できるかぎり早急に場所については知っておきたかった。もし余裕があれば、木像を奪うことも考えているものの、さすがに一年二人と五年一人ではいくら、は組の陣地だとしても難しいだろう。

「少し走るぞ。この辺に他チームが集まってくる前に抜けて、待ち伏せするぞ」

先程の焙烙火矢で、この辺で戦闘が行われていることは全員思ったはずだ。ならば、誰が戦い、誰がやられたのか、それもまた情報として重要な部分だ。近づきはしないだろうが、遠巻きに確認はどのチームであってもするはずだ。

八左エ門たちはその確認に来たチームをつけて、陣地を見つけるつもり作戦だったのだが、

「うわああ……！」

「平太!？」

突然、平太が姿を消した。先程までいた場所には人が一人だけ落ちそうな穴。

「これは……」

見事なタコツボだ。忍術学園に通っている生徒ならタコツボを見ただけで、ある人物が思い浮かんでしまうのは仕方がない。

平太を助け出しながら、八左エ門はもう一度辺りを確認するが、やはりない。

「……う、嘘だろ？」

嫌な予感に背筋に寒気が走った。

その頃、またひとつ縄を結び終え、罾を作り終わった喜八郎が立ち上がると、枝を抑えていた伝七がそつと手を離す。そして、すぐに別の場所に向かう喜八郎を青い顔で追いかけた。

「せ、先輩……！ 本当にこれでいいんですか!？」

「あ、そこ気を付けてね」

「ひいひい!!」

ここについてからというものの、ずっと罾を作り続けていた。しかも、罾があるというサインを置かないで。

もはや味方にすら、少し離れたらわからなくなってしまふ罾に、伝七も悲鳴を上げる以外なかった。先に進むにしても戻るにしても、周りは罾だらけ。喜八郎についていくのが一番安全というこの状況。

「ん?」

「ど、どうしたんですか？」

「おやまあ……同じこと考えてる人がいる」

「え?!」

喜八郎が指を指す先をよく見れば、確かに細い縄が仕掛けられている。天才トラパーと呼ばれる綾部でなければ気付かなかっただろう。やはりそこにもサインはない。伝七がなおさら顔を青くしたのだった。

「ほら先輩！ がんばってくださいい！」

「こ、こんな予習してないよおっ!!」

兵太夫もまた藤内と共に、サインを置かずに次々と罾を仕掛けていた。

「僕とカラクリ作る予習はしたじやないですか」

「それはしたけど、サイン置いてない罾を見つけない予習なんてしてないよー！」

涙目になりながらも、嬉しそうに顔を輝かせている兵太夫を追いかける藤内だった。

その頃、その地点を抜けた青葉は何かに気がつく、すぐさま木の影に隠れた。三郎次たちも慌てて向かいの木の影に隠れた直後、轟音と共に先程まで三郎次たちがいた場所に布に豆をつめた弾が地面にあたって弾けた。

「うひゃあー！」

「ゆ、ゆり子!？」

確かに三人が向かう先には三木エ門とゆり子がいた。

「先輩の予想通りだ」

普通なら戦闘しているであろう場所は避けるのが当たり前だが、青葉であればあの音が嘘だと分かった上で最短距離を最も安全だと思つて走り抜けてくる。そう断言したのは三郎だった。

本来、攻め手の方向大きくふたつに分けるための作戦だが、青葉に對してならひとつに絞れる。同じ学級委員長委員会だからこそその読みだった。

「三郎のやつだな……」

青葉もすぐにはめられたことは理解した。

「付き合いが長いと、さすがに行動パターンとか思考パターンとかもある程度予想がつくかあ……」

それに敵チームに誰がいるのかわかっているのだ。ある程度手も読める。

「ど、どうするんですか!？」

三郎次と久作が慌てる中、青葉はじつと三郎次を見つめると笑つた。

「三郎次、焙烙火矢は持つてる?」

「え? あ、はい。委員会で作ったちよつと強めの光の物なら」

「うん。いいね。じゃあ、点火してギリギリまで待つてから三木エ門の前に投げよう。それと同時にろ組の陣地へ入る。あとは陽動だ。わかるね?」

二人の表情が強ばった。三木エ門がいるということは、もうろ組の陣地ということだ。つまり、三木エ門を抜けたらその時点で青葉は二人を置いていく。

陽動は確かに必要ではあるが、それは他の人に任せ、ここで三木エ門と青葉をにらみ合いさせておいた方がい組のためではないかと、二人は目を合わせる。

「……まあ、俺も持つてるから、三郎次がやりたくないなら別にいいよ？」

そういつて懐に手をやる青葉に、三郎次が慌ててやるといった。タイミングが重要なこの作戦で、こちらは二人、あちらは一人。しかも、もうすでに見捨てる気満々の青葉に焙烙火矢を投げられたら、三木エ門との睨み合いを任されることになってしまう。

それならいつそ、自分が投げたほうが幾分かマシだ。

「ん？」

三木エ門が転がってきた球を目にしたのは、本当に一瞬だった。

眩しい光に視界が真っ白に塗り固められ、耳には確かに誰かが走り去る音が聞こえるものの、見えなければ撃つこともできない。

「くっそー!!!」

しばらくは、視界も回復しそうになかった。

5話 攻め時の段

ろ組の陣の一部で情けない悲鳴と笑い声が上がっていた。

正確に言えば、タカ丸によつて変な髪に結われた下級生の悲鳴とそれを見て笑う守一郎の声。

「……」

その様子に苦笑いになりながらも、周囲に目を向けるものの、人が少なすぎる。

しかし、守っている忍たまはいないが木像はある。明らかに罠だ。

「よし」

逃す手はない。

一気に駆け寄ろうとすれば、その瞬間飛んできた縄標。体を反らして避ければ、縄標は後ろの木を抉った。

「あれ？ 見つかった？」

「もそ……」

「あー、確かに松ちよ先生に比べられたら勝てないな……うん。おわっ!」

また投げられた縄標を避け、距離をとる。

「いやいや、長次。本気すぎない……?」

「もそ……青葉の口は、開かせないのが、一番」

揃いも揃って、話を聞かない、喋らせないが一番の解決法とは。

「悲しくなってきたな……俺、なにかやったか……?」

すぐさま頷かれては、青葉も悲しげに目を伏せるしかない。

しかし、容赦なく飛んできた縄標。

「長次君ッ!」

「哀車の術……」

「お、俺、そんなに信用ない!? 逆に吹っ切れるぞ!? コレ!!」

「……」

青葉と長次が戦っている頃、ろ組の陣の近くでは、作兵衛たちが悲鳴を聞きつけて走っているところだった。

方向音痴とはいえ、さすがに前を走る作兵衛の後ろを走るだけなら

大きくは間違えないようで、作兵衛の労力もずいぶん減っていた。
「三人共。ストップ」

声と共に降ってきた顔のよく似た二人に、三人とも足を止める。
五年生の鉢屋三郎と不破雷蔵だ。

「今、は組とい組がろ組に攻めてきている」

「やっぱり!!」

「なら急いで戻らないとー!」

「いやー! 私たちは戻らなくていい」

三郎の言葉に、三人は首をかしげると、三郎はそのまま続けた。

「は組の陣地は見つけたか?」

「はい」

「じゃあ、僕たちは今から、は組へ奇襲をかける」

「作兵衛たちは、ここで青葉先輩が来たときは足止めをしてくれ。
見破られる危険がある」

そう言うと、三郎は変装すると、ニヤリと笑った。

「私が先輩のフリをして、木像を奪う」

「みんな、交代で休憩も取るんだよー?」

は組の陣地で伊作が声をかければ、一年生たちの元気な返事が返ってくる。

「それじゃあ、二人ずつ交代で休もう」

「誰からにしようか」

「そうだなあ……」

庄左エ門が考えていると、後ろの草むらから枝が折れる音。一斉に振り返ると棒を構え、息をのむ。

「だ、誰だー!」

乱太郎が声を上げれば、その草むらは揺れを増し、少し汚れた深緑の忍装束が現れた。一人はボロボロでもう一人に肩を借りており、支えている一人は呆れたような苦笑いを浮かべていた。

「俺だよ。そんなに怒鳴らないの。乱太郎」

「す、すみません……衣笠先輩って、アレ?」

青葉が抱えているのは、伊作だ。

「伊作先輩……う？」

「い、いやあ……少し様子を見に行ったら落とし穴に落ちて……みんな、僕がいない間、大丈夫だった？ 誰も怪我してないかい？」

「え、え？ え？」

乱太郎だけではない。ここにいる全員が目丸くして、奥に座っている伊作と、ボロボロの伊作を交互に見ていた。

「伊作先輩が、二人？」

「ま、まさか!!」

「鉢屋先輩の変装!!」

忍術学園一の変装名人の三郎の変装を、見ただけで見分けられる忍たまはあまりいない。ましてや、本気で変装している三郎を見破るのは、先生だって難しい。

「ど、どっちが本物の伊作先輩!？」

「庄ちゃん」

「ぼ、僕にもこれはさすがに……せ、先輩」

この中では唯一、三郎の変装を見破るのに長けているのは、同じ学級委員長委員会の青葉だ。

庄左エ門が助けを求めれば、困ったように眉を下げる。

「この状況で、俺がこっちの伊作を擁護したところで、信憑性に欠けると思うが……そうだなあ、強いて言うなら、伊作がここまで不運に見舞われてないのは、少しおかしいってことくらいだな」

不運大魔王と呼ばれるほどの伊作が、今の今までなにも不運に見舞われてないのは、確かにおかしかった。

むしろ、落とし穴に落ちたという伊作の方が本物のように感じる。

「つまり……」

「こっちが偽物だアア!!」

一年生の叫びと、伊作と巻き込まれた数馬の叫びが、は組の陣地にこだました。

「……で、奪われたと」

本物の青葉が戻ってきた頃には、すでには組に置かれていた偽物の木像は無くなっていた。

「ごめんなさい……」

「三郎の奴がいけないから、まさかとは思ったが……本当に性格読まれてるってのはやりにくいな」

ため息をついた青葉に、一年生がもう一度謝ると、怒ってないと笑った。そして、本当にボロボロになった伊作がろ組の話聞いた。

「あっちの木像は仙蔵がうまくやってくれた。しんべエ、喜三太。仙蔵が通るであろう道で、木像を受け取ってきてくれ」

「わかりましたあ！」

青葉に場所を聞くと、喜三太としんべエは楽しみに駆け足で走っていった。

「素直に渡してくれるかな？」

「ま、裏切られるだろうなあ……」

だからこそ、青葉が奪えるなら奪うつもりだったのだが、仙蔵も同じように考え、先に見つかった青葉が長次の気を引くしかなかったのだ。

「ま、仙蔵が奪ったところは長次にも見せたし、三郎が持って帰ったのが偽物だって長次ならすぐ気づくだろう」

「え?!? 偽物?!」

なんでもないように頷く青葉に、低学年は驚き、魂を飛ばしかける。「じゃあ、本物はい組にあるということですか？」

ただ一人、冷静な庄左エ門のおかげで、飛び出しかけた魂は体に吸い込まれていく。

「庄ちゃんってば、相変わらず冷静ね」

「あれ? でもそれって、まずくないっすか？」

「きり丸? まずいつて?」

「だってそうだろ? 俺たちの木像はい組、ろ組の木像も立花先輩が持ってて、それは俺たちは組がもらえるはずだけど、素直に渡す訳がない」

「あゝ!」

それはつまり、い組にすべての木像が集まることを意味していた。

「どどどどどどうしよう!!」

「このままじゃ、実技も勉強もできるい組って、伝七とか佐吉に言われ続けるぜ」

「そこなんだ……」

「で、でも、どうすれば……!!!」

一年生たちが青葉に助けを求めるように見上げれば、青葉は困ったように頭をかくと、笑った。

「いやーこれはもう、アレだな!」

吹っ切れたように伊作に一度目を向けると言い放った。

「死なばもろとも作戦、だな!」

6話 試合終了の段

「時間も無いこの状況で、あいつらがやれることは少ない」

兵助ももう一度火縄銃を確認すると、森の奥を警戒した。

佐吉は木像を半分土に埋めて、その表面をよく固めながら、文次郎を見上げる。

「陣に像を持ち帰ることを諦めるだろう。そして、全員に負けさせる」

「そ、そんなことが可能なのですか?」

佐吉が聞けば、文次郎は頷く。

「ルールにあっただろう。木像は各組の旗から十尺の範囲内にある個数でカウントすると。つまり、その範囲から出してしまえば、俺たちも0になる」

「え!? そんなのありなんですか!」

「ヘリクツですよ!」

「ヘリクツだろうがルールはルールだ」

学園長もそれを踏まえた上で、あのルールを作ったのだろう。それに、青葉ならひと組みだけうまい汁を吸わせる訳がない。引きずり落とすにいくるはずだ。

「各方向の守備は久々知と尾浜を中心に行う。俺はここで像を死守する。仙蔵と孫兵も戻り次第、手助けに入るだろうが、今度はる組とは組からの攻撃だ。ギンギンに気合を入れろ」

低学年は悲鳴を上げ、五年生もまたくるであろう六年の影に喉の奥で悲鳴を上げていた。

仙蔵は予定とは違う道で陣地へ戻ろうとしていれば、目に入った小さな人影。

「立花先輩!」

「ふ、福富しんべエ、山村喜三太……!? なんでお前たちがここに?」

聞く必要もない。青葉のせいだ。

「先輩の木像を受け取ってこいって、青葉先輩に言われましたー!」

やはり。

「そうか。それはわざわざすまなかったな。だが、これは渡せない」

「ええ!？」

「どうしてですかあ!？」

「むしろ素直に渡すと思ったのか？」

「はい」

即答されて、コケそうになりながらも、体制を元に戻せば、二人を諭すように言う。

「いいか? 忍者ならまず疑え。信じるな。約束は裏切られることを考えて行動しろ。いいな?」

それだけ伝えると、二人の泣き声を背中に聞きながら、急いで遠ざかった。

「死なば諸共作戦?」

小平太は陣地に戻つてくると、首をかしげた。

作兵衛があの後また、は組の様子を伺い聞こえた作戦を伝えれば、長次も腕を組み頷いていた。

「つまり、すべての像がい組にあるから、陣を捨てて、せめてい組にも勝たせない。つて、いうことですよね?」

「もそ……」

「確かに、先輩ならやりかねない。むしろ、最後に焙烙火矢でい組の陣地も爆破しそうだ」

「やりそうだな!」

笑っている小平太に、八左エ門が頬をひきつらせているしかない。

「で、い組の場所はわかってるわけですけど、僕たちはどうします?」
「……」

このままいけばろ組も負けだ。ここでおとなしく時間が終わるのを待つよりは、い組の勝利を阻む方がいい。

「イケイケどんどーん!」

「あ、道案内は俺が! 印のない罨地帯があるので……」

あの危険地帯を抜けられたのは、八左エ門が確認できただけで喜八郎ただひとりのはずだ。

「ある程度把握してますが、気を付けてください……」

疲れたように息を吐く八左エ門に、雷蔵も三郎も同情するように肩を叩いた。

地平線に日が触れ始めた時、火縄銃の音が響いた。

「まったく……」

青葉は、頭上に降りかかった豆を落としながら、火縄銃を撃った相手を見た。

「勘ちゃんってば、だいたーん。今度の会議でカステラの紙あげるね」「そういうのパワハラって言うんですよー?」

笑いながら、伊作に矢羽根で合図すれば、もっぱんが投げられた。「うわっ!!」

慌てて逃げ出す勘右衛門に、あとを追う一年生と二年生。い組の陣地へと走っていた。

「伊作」

「大丈夫。伝えてあるよ」

「ならいい。ようやくかあ……んじゃ、留さん、文次郎の足止め頼むよ」

「おう。あのムカツク顔、ボツコボコにしてやるよ」

「それは足止めっていわないけど、まあいいや」

「二人共怪我しないようにね」

無茶な注意をしながら、三人もい組へ向かった。

い組の陣地周辺は、残った生徒たちで乱戦状態だった。

中でも派手なのは、焙烙火矢と石火矢を容赦なく撃っている仙蔵と三木工門だ。

「仙蔵くん、俺が好きなの? 焙烙火矢をプレゼントしてくれるなら、火がついてないのがいいなあ」

「そういうな。燃えるような気分が味わえるぞ」

一番警戒すべき青葉を常に警戒しながらも、太陽にも目を向ける。あと少し、あと少しで完全に日が沈む。そうなれば、い組の勝ちだ。

半分地面に埋めて、取り出しにくくした像の近くには文次郎が、「いない!?!」

視線を巡らせれば、留三郎と勝負している。五年はといえば、二人共長次の足止めをしているらしい。伊作は、見当たらない。おそろく、喜八郎の作った罫にでもはまっているのだろう。

もう一人の六年である小平太も見当たらない。ついでに、滝夜叉丸も見当たらない。

「……連れてかれたか」

「ある意味一番の被害者かもなあ……」

よく見てみれば、金吾もいない。もはや、敵味方はあまり関係ないらしい。

「おっと……」

木像に近づくい組の姿に、仙蔵がひとつ焙烙火矢を投げれば、慌てたように下がる二人。

「敵味方関係なしか……!?!」

「この状況で近づく奴は、味方ではないからな。鉢屋」

三郎も眉をひそめる中、青葉は一步下がると、大きく息を吸い指をくわえ、吹いた。

ピイイイイイイイ!!!

試合が終了のような指笛の音に、その場にいた全員の視線が青葉に向く。

そして、数秒もしない内に、本当の実習終わりを告げる法螺貝が森に響いた。

「……おーしまー」

その瞬間、青葉の目が弧を描いた。

「組別サバイバル実習、優勝は……は組ツ!!!」

学園長の言葉に、驚きの声を上げたのは、は組の一部を除いて全員だった。

仙蔵たちもすぐに木像を確認するが、半分埋まったままでその場から動いていない。

「な、なぜです!? なぜは組が!？」

学園長が笑いながら指したのは、歪な『は』の文字が書かれた幕。その近くには、恥ずかしそうに筆を持った三反田和馬の姿。

「……………ま、まさか」

和馬は忍術学園で特に影が薄い。それこそ、同じ委員会や同じ組の人に名前を忘れられるくらいに。

そんな人物があゝの乱戦の中、気配を殺して、『い』の文字を上から『は』と書き換えていても、気づけるはずがなかった。

「あー……………ただで負けるとは思ってなかったけど、そう来たかあ……………」

「焙烙火矢だと思っただんだがなあ」

「それで体育委員会のメンバーいなかったのか……………」

あゝの乱戦の中、体育委員会が見当たらないと思っただら、小平太が避難させていたらしい。

「というか、今回、俺、焙烙火矢系ひとつも持ってきてないから……………」

ため息混じりに言った青葉に、目を丸くした二人がいたが、二人が声を出す前に、一年は組が青葉を取り囲む。

「先輩、なんで言ってくれなかったんですか!」

「えー……………は組のよい子たちは、嘘をつくのが下手だから。それに……………」

はつきりと言ってしまふ青葉に、一年生は照れ、文次郎は悔しそうに激しく頭を木に打ち付けた。

「ずっと監視されてたし」

「最初からこれを狙ってやがったなあ!!」

青葉は最初から警戒していたのだ。だから、ずっと孫兵を偵察としては組の陣の近くに潜ませていた。作戦は常に筒抜けのはずだった。少なくとも、最初の交渉があつた後から、ここへ突入し、勘右衛門と接触するまでの作戦は。

つまり、知らない作戦となれば、それはこの森へ移動する前から考えていたということになる。

「いやあ……みんな、本当に俺が好きすぎて、照れちゃうわ」
笑う青葉に、文次郎はまた強く頭を打ち付けた。

5年と姫守り 1話 帰宅と出発の段

「いっちば〜ん！」

門と潜ったのが、1時間ほど前。

「——だと思ったんだけどなあ」

と、山道を下っているのが現在。

「申し訳ありません。私事に付き合わせてしまい……」

「ああ、すみません。気にしないでください」

振り返り謝った上質な着物を身に付けた女と後ろに控えこちらを睨む側近の男。

周りには、困ったように笑う5年生。

「日頃の行いのせいじゃないですか？」

「勘ちゃん。三郎、ハチと屋敷までダツシユ」

「勘右衛門!!」

「横暴だあ〜〜!」

文句を言われながらも駆け出す勘右衛門を、三郎と八左エ門も追いかけていった。

残った5年の兵助と雷蔵は、なんとも言えない表情で「がんばってー」と手を振る。

「えっ……あの」

「良いのです。もうすぐ山を抜けます。護衛の数が多過ぎるのは逆に目立ちます。むしろ、屋敷に敵が潜り込んでいれば大事。彼らはそれを指示されたのです」

「そ、そうなんですか……」

動揺していた女も側近の言葉を聞いて、兵助に目を向けると、頷かれた。

「……お嬢様？」

浮かない表情の女に側近も首をかしげると、首を横に振った。

「私のせいでいろいろな方に迷惑をかけてしまつて……」

「迷惑など……！ 私どもは貴方様の幸せを願ひ」

「そうですよ！ 武家同士の結婚に護衛はつきものですし！」

「迷惑とは思っていません！」

雷蔵と兵助も慌てて頷くが、女はなんとも言えない表情で礼を言われた。

「お互い納得し合つてる結婚なんて、こちらとしては参列者の感覚ですよ。花でも撒きましようか」

笑う青葉に、女も少しだけ表情を緩めた。

今回の任務は、武家の娘である彼女、おしはな庄波奈と武家の息子とりのこりん鳥野古凜の祝言のための護衛だった。

武家同士の結婚のため、反対派閥からは刺客が送り込まれる可能性はあるが、両家は仲も良好、本人たちも互いに思いあつているといふ、比較的気楽な任務だった。

これが、両家の仲は最悪、それを取りなすための政治的結婚であり、本人たちも気持ちでは同意しておらず、片方は想い人がいる。などのことがあれば、もう大変だ。

「——とはいえ」

両家の縁がより強固になることを良しとしない人間もいるだろう。気を抜いてはいけないことは、変わりない。

「勘右衛門。どうだった？」

「屋敷の周りに曲者は見当たりませんでした。今はハチが見張つてます。三郎は屋敷の中を確認を」

屋敷について、早速勘右衛門から報告を聞いてから、波奈のいる部屋に戻れば、兵助と波奈しかいなかった。

「あれ？ 雷蔵は？」

「間借さんに、波奈さんの部屋を案内してもらつてます」

その雷蔵と間借は、一通り波奈の部屋に誰も潜んでいないことを確認すると、部屋を出た。

「おかりなさいませ」

出たところにいる女中はふたりに頭を下げる。

間借がそのまま脇を通り過ぎ、雷蔵が通り過ぎようとした時、聞こえた音。

「……あの！ すみません。間借さん」

「はい」

「こちら何があるのでしょうか？」

雷蔵が、波奈の部屋の向こう、歩く方向と逆の方を指せば、間借は少し考えたあと、

「当主様のお部屋です。その先は、一部の人間しか入ることが許可されていません。当然、貴方もです」

「間借さんは許可されているのですよね？ 護衛にあたり、一度ご挨拶をしたいのですが」

「……構いませんが、6年生の彼が挨拶をするのではないのですか？」

「今、呼んできます」

「わかりました」

「私でよろしければお客様をお呼びしてきますが……」

「じゃあ、お願いします」

女中が早足で客室に向かった。

青葉が当主へ挨拶に行っている頃、勘右衛門と兵助は波奈の部屋で、結納品を見ていた。

「からくり箱？」

「こんなに大きなのは初めて見たのだ」

手のひらサイズなら何度か見たことがあるが、クナイでも簡単に入りそうな程大きなからくり箱は初めてだった。

「挑戦してみますか？」

「え！ いいんですか？ なら……」

勘右衛門がからくり箱に挑戦していると、近づいてくる足音。

三つだ。

「ただいまーって、デカイ箱だな……からくり箱？」

「本当だ……」

「！ それは、明後日、結納するための！」

「私が許可したんです」

「お、お嬢様……わかりました。今日だけですよ。明日には、中に物をいれるのですから」

「はい」

ため息をついた間借に、また近づいてくる足音。

「お茶をお持ちしました」

女中が持つてきた湯呑みは、6つ。

「では、私は少し席を外し——」

「おや……急ぎの用でないのでしたら、お茶を一杯飲んで行かれませんか？ せっかくのお茶が余ってしまいますし。今日、明日の警護について決めてしましましょう」

「……わかりました」

そう言われては、仕方がない。

間借も中には入り、座る。

「こちらの屋敷から警護はどのようになっていきますか？」

「特別に設けているのは、この棟にひとり。当主様の部屋にひとりです」

「では、寢室の警護にひとり、屋敷の警護に二人としましょう」

「明後日の結納日はどうされるおつもりですか？」

「確認が終わり次第判断します。今夜中にはお伝え致します」

間借が、お茶に口をつけようとしますが、まだ熱く、一気には煽れない。

それはどうやら、他の者も同じようで、青葉も息を吹きかけていた。

「あ、ところで、先程仰つてた物というのは？」

「ああ、この箱に、赤ん坊用の服や玩具、櫛などを入れるのが習わしなんです」

「ええ。本当に大事な箱なのですよ」

「す、すみません……」

「いいんですよ。明日までは何も入っていないんですから」

「勘ちゃんファイト。そんな大きなからくり箱開ける機会そうないよ」

任務中だというのに、緩い様子の青葉に呆れながらため息をつく

と、ようやく飲める程度にぬるくなったお茶を一気に煽った。

2話 下調べの段

外でネコが鳴いた。

「あら……ネコ」

「ああ、すみません。昔から何故かネコに好かれるみたいで」

忍術学園では、すっかりお馴染みの『昼寝すると猫山ができる』という、青葉の謎の特技？ だ。

「おとなしい子ね。この時間の警護は青葉さんですか？」

波奈もネコの頭を撫でながら聞けば、首を横に振られた。

「私は外の警備です。間借さんに、明後日のことを伝えに来たのですが」

「間借なら自室じゃないかしら」

「そうですね。では、波奈さんにだけ先に伝えておきますね」

青葉は護衛の詳細を伝えると、ネコを抱えて間借の部屋へ向かった。

部屋の前につくと、妙に毛を逆立てる腕の中のネコ。

「……間借さん。青葉です。明後日の件でお話があります」

部屋の前で、しっかりとネコを抱きながら、声をかければ、数秒で出てくる間借。

「！」

「おや、ネコはお嫌いですが？ しっかりと抱いていますが——」

「——クシヨンっ!!」

「……先に外へ逃がしてきます」

ネコを外に連れ出してから戻れば、こちらを睨むような視線。

「申し訳ありません。ネコが迷い込んでしまっていたようで」

「ああ、いい。だが、離れていてくれ。また鼻が痒くなる」

「では、ここからお話します」

部屋には入らず、一度人がいないことを確認すると、護衛について語り始めた。

「まず三手に別れます。予定されていた道を、お二人に扮した我々。そして、波奈さんと間借さんも二手に分かれていただきます」

「……どういう配置になっている？」

護衛である自分が波奈と分かれるなど、気が気ではないだろう。少し鋭くなった視線に、青葉は頷くと続けた。

「間借さんは、私と共に。波奈さんには、三人付けます」

例え襲われたとしても、ふたりが足止め、ひとりが波奈を連れて逃げられる。

残りのふたりは、先ほど言ったとおり、二人に扮して予定通りに歩く係りだ。

「ルートに関しては、各班に我々がいますので、一任させていただきます」

「……随分と用心深いように感じるが、なにか出たか？」

「何者かが屋敷の様子を伺いに来ていた。ということは、確認していただきます」

「！」

「ただ狙いはわかりません。当主様か、波奈さんか、それとも間借さんか」

「私なわけがないだろう」

「可能性が一番低いので、私のみの護衛となりますが」

「君が一番強いわけではないのか？」

「まさか。私は、成績ドベ組ですよ。安心してください。波奈さんには、1年年下でも優秀な組をふたり、お付けします」

「そうか。ならいい」

疑い深くこちらを見る間借に、青葉も笑みを崩さず、外に出た。

「さて……どうしたものか」

翌日、腕を組んで唸っていると、襖が開く。

「先輩。そろそろ起きて——ましたか」

「ああ。三郎。おはよう。お茶の一杯でもいただけると嬉しいですね」

「残念ながら本日は閉店です」

「そりゃ残念」

「ところで、あのからくり箱開けるみたいですよ」

勘右衛門は結局開けられなかったらしく、悔しいから開ける様子を見るそうだ。

「先輩も見ると早めに行った方がいいですよ」

「……いや、調べることにあるからいいや。勘右衛門は答え合わせするんだろ？ 悔しがると、すぐに見れないのだけが心残りだ……」

不貞腐れるように口を尖らせる青葉に、三郎も苦笑を零すが、すぐに表情を戻す。

「様子を伺ってた奴らですか？」

「ん。そう。兵助にも頼むから、護衛は4人で頼むよ」

「はい」

「まあ、今日は何も起こらないだろうから……ひとつだけ頼むよ」

「なんです？」

「猫の世話」

「……………はい？」

伝え終わると、青葉は立ち上がり、外に出た。

「兵助」

見張りをしている兵助に声をかければ、すぐに降りてきた。

「どうしました？」

「ちよつと鳥野家で行ってきてくれないか。行きも帰りも偽物の道で」

「わかりました。例の件ですね」

「そ。俺は覗き見犯探ってくるから」

ふたりが屋敷を出てから数時間。縁側には八左エ門と雷蔵、波奈が座っていた。

三人の前には、一匹の猫。昨日、迷い込んだという猫だ。

「住み着いているのでしょうか？」

「どうでしょう……猫ですから」

「でも、猫だってお気に入り場所はあるぜ？ 案外、ここが好きなのかも」

「だったら間借も喜ぶかも」

「間借さん、猫好きなんですか？」

「はい。他の者に示しがつかないとかで、あまり堂々と愛でてはいませんが」

「あー……ありますよね。そういうの」

小さい頃から一緒にいる波奈は、何度か猫と戯れる間借を見たことがあるが、他に見られたところで問題あるとは思えなかったが、本人が強く拒否していた。

「お嬢様」

「あ、はい。失礼します」

今日は、出立のため、波奈は忙しく準備を行っていた。

雷蔵たちも護衛の為にいて行こうとしたが、服に関するということということで、その場で待つことになった。

「あちらはあちらで忙しそうだな」

「まあ、戻ってこれるとはいえ、嫁ぐんだし。準備も必要だよ。そっちは？ また来た？」

「ああ。何度か、物売りに化けて来たよ。特に何もしていかなかったが」

向こうも監視に気がついていたのだろう。

しかし、狙いが波奈なら明日までに何か仕掛けてくるはず。

「ふたりは、このまま波奈さんのことを頼む。私は、兵助と先輩が戻ってくるまで監視を続ける」

「了解」

こちらを除いていた忍者が、変装して入り込まないように、三郎は屋敷の監視に専念することにしたのだった。

3話 最終確認の段

すっかり日も暮れた。

「はあく……手掛かりなし」

青葉は項垂れていた。

今日一日、敵対する勢力に関して調べていたが、二人の結婚を武力行使までして止めようとしている様子はなかった。

となれば、単なる情報戦のための監視か。それにしては、三郎からの報告にあつた潜入しようとしていた輩が、辻褄に合わない。

「……………」

出発まであと数刻。

戻ってきた兵助の話では、烏野家も受け入れや式の準備で大忙しだそうだ。

忍者が潜入するには打って付けで、案の定、数人忍者が紛れ込んでいるようだ。

「でも、全員結婚の騒ぎに乗じてるだけで、ふたりの婚約を阻止しようという様子ではありませんでした」

武家の結婚だ。乗じて、盗みたい情報だつてあるのだろう。

「さて……どうするか」

もうひとつ、打っておくか。

「荷物の確認？」

露骨に間借が顔をしかめた。

「はっ」

荷物は、偽物も含め、すべて押家に頼んでいる。

その荷物を確認させて欲しいと言ったのだが、この反応だ。

「貴方がたを信用していないわけではありませんが、これは押家の大切なもの。いじられては困ります」

「承知しています」

抱え込んでいる忍者であれば信用はあるが、雇われ忍者に、すべて見せるわけにはいかないだろう。

それこそ、盗む技術だってあるのだ。元々別に雇われていれば、安々と裏切られるのだから、全部信用するわけにもいかないだろう。「ですから外見だけでも。特に、間借さんと私は先に出立しますし」
「……仕方ありません」

細工をされないようにか、間借も一緒に荷物の確認を行う。

外見は、同じ風呂敷で包まれた箱が二つずつ。どちらかがからくり箱でもう一つが結納品。

それから、着物が一着。一着は、すでに三郎たちが用意のために持っていている。

「……確かに、これなら見ただけではわかりませんね」

「ご丁寧に全て同じものだ。」

「これでは見分けも何も無い。」

「わかりました。これで安心です」

これなら、開けるまではバレて本命に向かわれることもないだろう。

「勘右衛門」

「はい？」

「出発前の最後の作戦会議するよ」

「あ、はい」

見張りをしていた勘右衛門を、ちよいちよいと手で拱けば、走り寄ってきた。

部屋には、この作戦に関わる全員が立っていた。

「大まかには、前に伝えたとおり。三郎、八左エ門のふたりは、波奈さんたちに変装して、元々決められていたルートで鳥野家に向かう。」

波奈さんは、兵助、勘右衛門、雷蔵。間借さんには俺が、それぞれ護衛につきます。

道に関しては我々が案内します。落ち合う場所は、一応鳥野家だが、三郎、八左エ門は危険を感じたら、鳥野家には行かず、身を隠す。

その他、任務続行不可能であれば、連絡すること。

俺と間借さんは、すぐに出発するが、聞いておきたいことがある人

は？」

誰も手を挙げない。

「じゃあ、決まり。ああ、そうだ。もし知り合いにあつたら、こう言うこと」

冗談のような青葉の言葉に、五年生も不思議そうに頷いた。

間借と青葉が屋敷を出てすぐ、三郎たちも最後の仕上げとして、顔の変装を完成させると、波奈が驚いて声を上げた。

「すごい！ 本当に間借みたい」

「そうですか？」

「ハチ。喋るなよ？」

声だけは似ても似つかない八左エ門の声だ。

声を出さずに歩くだけなら、おそらくバレないだろう。

「さて、我々も行くか。任せたぞ。勘右衛門たち」

三郎たちも、偽物の荷物を抱えると、屋敷を出ていった。

そろそろ、波奈たちのグループも出た頃合かと、青葉たちは街道を歩いていたが、つける気配はない。

「……こちらに行っても良いか？」

「？ どうかしましたか？」

間借が指すは人目のある街道ではなく、細い獣道。

「先程、すれ違った男。見たことがある。仲が悪い、というほどではないが、なにかと敵に回ることの多い家の者だ」

すれ違った男。確かに、こちらに目をやっていたが、注意をするほどの人物ではない気もする。

しかし、この短時間では家同士の関係など把握しきれているわけではない。

「困なのだろう。怪しい人間は全て引き寄せるべきだと思うが」

それは一理ある。

敵らしき人間を見かけた途端、ひと目のない道へそれるなんて、怪しき満点だ。

「わかりました」

細く歩きにくい獣道を進むが、後ろにつける気配はない。

一応、振り返って、後ろに人影がないかも確認した時だ。
草むらが大きく揺れる音。

「うあつ!？」

弦が生い茂り、見えにくくなっていた先に足を踏み入れた間借の足が宙を掠める。

青葉が慌てて伸ばした手は、着物の袖を掠めただけ。

「間借さん!!」

崖の下に落ちていった間借の姿は、木に阻まれて見えなかった。

降りられる場所がないか周りを見るが、近くにはない。近くの弦を掴んでみるも、あまり強度はない。

確かに踏み抜けば体重を支えられず、落ちる。高さも持っている縄では足りない。

「……今行きます! 待っていてください!」

崖の下に声をかけ、降りれる場所を探しに走った。

一方、三郎と八左エ門は予定通りの道を歩いていた。

「」

矢羽根で伝えられる、つけてくる気配。

「」

八左エ門は後ろを伺いながら、矢羽根を返すものの、見つからない。

「どうしたの? 間借」

三郎もごく自然な動きで足を止め、首をかしげながら八左エ門を見た後に、振り返る。

だが、見つからない。

自分たちよりも上手の忍者だろうか。

「ほら、早く行きましょう。遅れてしまうわ」

なら、逃げるが勝ちだろう。

走るぞ。と伝えた時だ。足元に投げ込まれた鳥の子。

「!!」

飛び退いた瞬間、目の前が真っ白に変わった。

4話 遭遇の段

波奈、こと三郎とも分断され、早く合流しなければならぬというのに、合流しようとする、適確に石が飛んできて防がれる。

「——ッ」

焦る中、近づいてくる気配に目を向けた瞬間、見えた敵。

深緑色の忍装束を身にまとった、サラサラな長髪。

『もし、知り合いに会ったら』生麦 生米 生卵』と云うこと』

それは出発前に青葉に言われた言葉。

「な、生麦、生米、にやまたまごオー！」

半ばヤケに叫べば、迫っていたクナイが止まった。

目しか見えていない男は、いつものように一度顎に手をやると、

「噛んだらアウトか？」

「勘弁してください……」

「ふむ……」隣の客はよく柿食う客だ」

あの先輩。わざとか。

だいぶ前から分かっていた事実を再確認すると、覆面の男は口布を下げた。

忍術学園6年い組、立花仙蔵。その人である。

「それにしても、護衛は八左エ門だったのか。では、あつちは」

「三郎です」

「……………何も起きていなければいいが」

「あつちに行つたの誰ですか!?!」

仙蔵と同じく組の文次郎は、確かに戦い好きではあるが、三郎があの合言葉を言えば止まるはずだ。

八左エ門だつて気づいたのだから、三郎が気づかない訳がないだろう。となれば、向こうに行つた人物の問題。

仙蔵と共に三郎の元へ急げば、だいぶ泥で汚れた波奈の格好をした三郎。

その前に立っていたのは、小平太だった。

「無事か!?! 三郎!?!」

「無事なわけあるか！ あの先輩！ 恨むぞ！」

波奈を確保しようとしている小平太に対応するのも一苦労だといふのに、実習で出会ってしまった時に衝突を避けるための合い言葉が早口言葉だったなど、決めた人間を恨みたくもなる。

「いやー突然、早口言葉など言うから驚いたぞ」

「え……伝えられてたわけではないんですか？」

てつきり青葉から知らされているものと思ったが、小平太の様子からして違うようだ。

「ん？ ああ。一応、6年が全員実習に出る時は、出くわした時の為に合い言葉を決めていてな」

「それがさっきの……」

「どうせ会わないだろうから、大体テキトウなものを使っているんだがな」

ちなみに早口言葉は、しつかり7つ用意され、くじ引きで誰がどの早口言葉か決めたのだが、伊作が“坊主が屏風に上手な坊主の絵を書いた”という、長さも難易度も高い合い言葉を引き、

『絶対に会わないようにする……!!』

と、半泣きで叫んでいたそうだ。

「それにしても、お前たちが武家の娘の護衛についてるのか」

通りで屋敷に潜入しようとしても、見張りがいるわけだ。

「先輩たちは、波奈さんを拐えですか？」

「いや。その波奈って人の“からくり箱”に用があるんだが」

それって……と、三郎と八左エ門が目を合わせると、頷く。

「からくり箱って、結納品が入った？」

「ああ」

「……じゃあ、波奈さん狙っても意味ないかもしれないですよ」

「どういう意味だ？」

仙蔵が不思議そうに眉をひそめれば、三郎がにたりと笑う。

「協力、しません？」

兵助、勘右衛門、雷蔵の三人は、波奈を守るように辺りを警戒して

いた。

「でも、こそこそ結婚相手の家に向かうって、なんか嫌だな」

「仕方ないのだ。武家の結婚は勢力図が変わる可能性もある。中にも外にも、阻止したい輩はいる」

「まあ、そうなんだけどさあ」

勘右衛門は一度、波奈を見ると、頭の後ろで組んでいた手を解き、

「あー！ イタタタツ！」

「お、尾浜さん？」

お腹を抑え始めた勘右衛門に、波奈も慌てる。

「お腹イタアイ!! す、すみません！ ちょっと、待っててもらえますか？」

「勘右衛門!?!」

「兵助、ゴメン！ ホント、限界！」

切羽詰ったように草影に走っていった勘右衛門に、雷蔵も困ったように笑うと、少し離れたところで待っていていようと提案する。

「すみません……自分で荷物も持つって言ったのに」

出発してからしばらくして、重そうだからと波奈からからくり箱を勘右衛門が預かっていた。

それほど、先を急いでいるわけではないが、大事な結納品ごと草陰に行ってしまったては、こちらも動き用がない。

「い、いえ！ 荷物より、大丈夫でしょうか？」

「僕、様子を見てきます。兵助、お願い」

「わかった」

雷蔵が小走りに勘右衛門の消えていった草影に向かう。

「勘右衛門、終わった？」

「うー……少し落ち着いてきたあ」

紙や木の擦れる音。

それが何度か響くと、枝をかき分けて戻ってきた。

「いやーすみません！」

「いえ。もう平気ですか？」

「はい」

「無理はされないうでくださいね」

雷蔵と兵助は、なんとも言えない表情をこぼす。

「勘右衛門。箱、俺が持つてるよ」

「ああ、ありがとう。臭いについても大変だもんな」

「勘右衛門」

「すみません」

勘右衛門からからくり箱を受け取ると、また鳥野家に向かって歩きだした。

5話 任務完了の段

誰もいない。

枝に引つかかっている人もいなければ、倒れている人も。

「この辺か……」

木に登って確かめてみても、最近折れた枝を見つけたが、人はいない。

それ以外に人のいた痕跡はない。

「……」

膝に肘をついていれば、頭に落ちてきた重さ。

先程呼んだ猫だ。名前は十二郎。

「ああ。お前が来てくれたのか。ありがとなあ」

頭の腕を撫でれば、ゴロゴロと喉を鳴らした。

そして、掴みあげ折れた枝の元に下ろす。

「十二郎、この臭いを覚えてくれ」

猫も犬ほどに鼻がいい。

しんべエの食べ物に比べたら劣るかもしれないが。

「さて……と」

枝から降りて辺りを見渡す。誰もいない。

ふと聞こえた草むらをかき分ける音に、目を向ければ、探していた顔。

「間借さん」

名前を呼べば、相変わらずの仏頂面。

「無事でしたか」

ちように臭いを覚えて降りてきた猫は、相変わらず頭の上に降りてきて、ダレている。

「……」

「猫、ですか」

「ええ。賢い猫ですよ。そうは見えないでしょうが」

ええ。思いつきり頭の上でくつろいで、死体のように、腕を伸ばしきっているのだから。

頭の上なのに。

だが、俺には見えた。一瞬、間借の目が輝いたのが。

「でも、合流できてよかった」

近づけば、間借は相変わらず猫を見ていたが、すぐに俺に視線を戻した。

「生麦生米生卵」

すると、間借は一瞬顔をしかめさせたものの、

「ああ、そうですか」

「ご理解感謝します。確認のためです」

ため息混じりに、冗談のような早口言葉を返した。

「波奈！ 無事か。よかった……」

「古凜さん……！」

幸せそうに手を取り合うふたりを、三人も安心したように眺める。

ここはもう武家の屋敷の中。護衛も終わりだ。

「お付きの方々も、お疲れさまでした。そちらの荷物をお預かりします」

「あ、はい。圧家からの結納品です」

「かしこまりました。では、確かに」

からくり箱を受け取った鳥野家の使用人の中年の男は、丁寧に箱を抱きかかえると、部屋の中へと消えていった。

「で？ これで、俺たちの仕事はこれで終わり？」

「先輩を待たないとダメだろ」

「はい」

兵助にたしなめられ、勘右衛門も男が消えた先を一度見ると、すぐに視線を戻す。

「じゃあ、俺、外で先輩たちがくるか見てるよ」

「僕たちは、もう少し護衛かな」

勘右衛門は外に出ていくと、兵助と雷蔵は目を合わせると、頷き、波奈の元へと向かった。

木箱にはめ込まれた複雑すぎるからくりを解除する煩わしさと、これから開くことへの期待にいい息が上がってしまう。

「——クシュンっあ、——いかんいかん。落ち着け。落ち着け」

クシヤミで集中しすぎていたことに気がつき、一度、呼吸を整えて、辺りを確認する。

人の気配はない。きつと、花嫁の到着で盛り上がっているのだから。

鼻水をかんだちり紙を捨てると、改めてようやく最後の仕掛けになつた箱に向かう。

「よし」

最後の仕掛けを外すと、漏れる笑みを堪えきれないまま、その蓋をスライドさせた。

「……ない？」

しかし、そこには何もなかった。空の木箱だけ。

「どこだ!? 確かに入れたはずなのに!」

箱をひっくり返すものの、思い描いていたものはない。

「何をしている?」

冷たく響いた声に、顔を上げれば、立っていたのは古凜と波奈。

「わ、若様。これは」

言い訳をしようにも、開けたままの結納品の箱の前では、何を言い繕っても開けたことへの咎は受けてしまう。

「! 実は、妙に箱が軽く、よもや圧家が結納品を入れなかったのかと疑いまして……も、もちろん、お二人の仲は存じておりますゆえ、糾弾しようというわけではなく、ただ、事が順調に行くようにと」

あくまで、開けたのは事情があったのだと、伝えれば、古凜は険しい顔のまま。

「お前が欲したのは、圧家の土地の権利であろう」

「!!」

「すでにお前の企てはバレている。その上で、お前の長年の勤めに感謝し、この場での鳥野家からの破門だけとする」

「ご、誤解です!」

「いや、真実だ。すでに、お前が変装していた本物の間借さんが見つかった」

「!!!」

誤解だという言い訳を探したところで、変装するために襲った相手に、犯人だと告げられ嘘だと言い逃れられるはずもない。

男は何も言えず、何度も口を開いては閉じることしかできなかつた。

6話 目的はの段

青葉と五年生、そして仙蔵と小平太は、任務終わりも終わり、少しだけ気の抜けた表情で忍術学園へと向かっていた。

「いやーまさか、仙ちゃんたちの任務と被るなんて！ 個人的には伊作君と被りたかったなー！」

「ただ言わせたいだけだろ……」

早口言葉を言わせたいだけの青葉に、仙蔵も苦笑いをこぼすものの、被りたくなかったかといえ、嘘になる。

「そういうえば、どうして間借さんは私たちに自分の立場のこと言わなかったんだ？ 危うく波奈さんを傷つけることになったぞ」

まさか向こうも、イケドンするとは思っていないだろうが、確かに土地の権利書を奪うだけなら、手荒な真似をするかもしれない。

なんせ、開け方がわからないからくり箱だ。中身を奪うためなら、箱の破壊もしくは開け方を知っているものへ無理にでも聞くほかない。

「そりゃ、向こうに自分が解放されてるって悟らせないためだよ。バレて、波奈さんより先にあっちが戻って適当に『これは圧家の罠だ！』なんて言われて結納破棄になったら、波奈さんが悲しむ」

「ああ……」

自分は捕らえられているというのに、波奈思いの人だ。

とはいえ、今回の任務。学園長先生は生徒たちに任務を割り振った張本人だ。仙蔵と小平太が関わっている任務に、五年を関わらせ、その上で別の任務から返ってきた青葉に五年を率いらせる。しかも、互いに状況を知っているわけではないため、九割方、戦闘になることを見越していただろう。

つまり、この任務、忍者ではよくある“知らなかったから味方と戦闘となり、殺してしまう可能性がある”ということをもって知らせることが、学園長先生の目的だったのだろう。

「けど、まあ」

学園長先生の目的は置いといて、この任務を成立させるためのもう

ひとりの人間が必要だ。

そう、依頼者だ。

間借が偽物の可能性に気がついていた上で、仙蔵と小平太に探すように依頼し、別に波奈の護衛を依頼した人物は同一人物であり、それが学園長先生の協力者。

つまり、冨家の当主であり、波奈の父親だ。

違和感は無くはなかった。自分の娘を、何十年と仕えてきた家臣ではなく、会って間もない子供に護衛させるなど、当主としても、父親としても、そう簡単に頷くとは思えない。

あっさりと頷いたのは、知っていたから。

そして、間借と同じく、娘の幸せを壊したくはなかったのだろう。

「どうした？ 何か気にかかることでもあったか？」

仙蔵が怪訝そうな目で青葉を見つめる。

「そうじゃなくて、あの変装してた人も運が悪いなあって」

どんな厳格な父でも、娘には弱いということか。

「確かに。猫でクシヤミと鼻水が止まらなくなるのに、変装相手が猫好きで、しかも猫を筆頭に動物引き寄せる青葉先輩が任務で来るとは思ってたでしやうね」

体質はどうにもならないとはいえ、三郎ほどの見破る目を持っていないくとも、容易にわかってしまう条件が、こうも揃ってしまうのは、もはや同情するレベルだ。

屋敷で三郎から、間借が忍者の変装の可能性があることは聞いていたが、まさかそんな欠点があるまでは思っていなかった。

「伊作先輩とどっちが運悪いですかね？」

「勘右衛門……」

「あっちの方が悪いんじゃないかな？ 伊作くんは不運大魔王とはいえ、善行積んでるからか、本当に悪いことはなかなか起きないし」

善行積んで、あの不運かと、青葉以外が伊作へ同情を送ってしまった。

「あ、団子屋。先輩。寄っていきませんか？」

勘右衛門の言葉に、青葉は仙蔵たちに確認すれば、すぐに頷かれる。

「よーっしっ！ 早い者勝ちだ！」

「なぜそうなる!?!」

「団子は逃げないんだから……」

「ま、待ってって！ 勘右衛門！」

五年生が駆け足で団子屋に着くと、奥から現れた見知った顔。

「「「あ」「」」」

ばっちりと目があった。

少し遅れてきた六年生の三人も、同じように団子屋の店員を見ると、ニヒルに笑った。

短編

油断厳禁の段

しんべエと喜三太はアルバイトのために、町に来ていた。

「はい。じゃあ、この炭をあつこの屋敷まで運んでいってね」

「はい」

元気な声で返事をする、背負った炭を武家屋敷へ運ぶために歩き出す。

鼻歌交じりにふたりが歩いていると、道に座り込んでいるお婆さん。

「どうしたんですか？」

「どこか痛いんですか？」

苦しそうに表情を歪めているとなれば、1年は組の良い子は放っておけず、慌ててお婆さんに駆け寄った。

「あいたたた……ちよつと腰がね……やっぱ無理して歩いてきたのが悪かったかねえ」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃよ。ちよつと休めば良くなる」

「どこか休める場所……あ、すみませーん！」

喜三太が近くのお茶屋に駆け込めば、現れた若い店員。

「はい」

「あの、お婆さんが腰が痛いって……ここで休ませてもらえませんか？」

「それは大変だ。どうぞ、ここに座ってください」

若い店員の手も借りながら、軒先に置かれた椅子にお婆さんを座らせる。

「ありがとうございます。ああ、でも……やっぱこれを届けるのは無理かねえ……」

「手紙？」

お婆さんが取り出したのは、手紙だった。

「あのお屋敷で働いている息子にね。ずっと帰ってこないから、せめて手紙くらいって思ったんじゃないけど……」

寂しそうな顔をするお婆さんに、喜三太としんべエは顔を合わせる
と、頷いた。

「僕たちが届けますよ!」

「ちようどあのお屋敷に炭を届けに行くんです!」

「あら……いいのかい?」

「はい!」

じゃあ、お願いするよ。と行って、渡された手紙と息子の名前をしつかりと覚え、お屋敷に向かって歩きだした。

ふと、視線を感じ喜三太が振り返るものの誰もいない。

「はにゃん?」

「どうしたの? 喜三太」

「ううん。お婆さん、いなくなってる」

「中に入ってお団子食べてるんじゃない? ああくん! 僕も食べたあ〜い!」

「これ届けてからだよ」

喜三太に背中を押されながら、たどり着いた屋敷に入り、炭を渡すと、もうひとつの目的の手紙を出した。

「弥右衛門さんって方にお手紙です!」

「お婆さんからです!」

「弥右衛門? そんな奴はこの屋敷にはいないぞ」

「ええ!?!」

「どういうこと?」

「わ、わかんない!」

場所も名前も間違っていないはずだ。ふたりが困っていると、男は喜三太の持っていた手紙を取ると、封を開いた。

「!! これは……おい! ガキども! そのお婆さんってのはどんなやつだ!?!」

「ええええ!?!」

突然、怒り始めた男に、喜三太もしんべエも震えながら、首を横に

振り、お茶屋にいることも告げたが、

「そういえば、さつきいなくなつてたよ!？」

「なんだとオ!? 貴様ら、まさかこの屋敷を潰そうとしている奴らの手下じゃないだろうな?」

「ええええ!?! 僕たち、そんなこと思つてません!」

「ここに来たのだつて初めてで!」

「ええい! 怪しいガキどもだ! 牢屋に入れて——」

「何を怒っているんです?」

喜三太としんべエの前に男から庇うように立つ、腰に刀を指した男。

その顔は、ふたりにとつてとても見覚えのある顔だった。

「その怪しいガキどもを引つ捕えるんだ!」

「怪しいとは……? その手紙に何か書かれていたのですか?」

「ツあ、ああ! そうだ。この手紙には、攻め込んでくる日時と場所が

書かれていた。つまり、内通者がこの屋敷にいることに他ならない」

「なるほど。内通者が紛れ込んでいることはわかりましたが、彼らに

は関係ないのでは? 子供ですし、駄賃目当てかもしれない」

彼の言うことは筋が通っていた。ただ炭と手紙を届けに来ただけ

の子供が、内通者に関わりがあるとは考えにくい。そもそも、本当に

内通者なら、わざわざこの屋敷にいない人物の名前を上げて、怪しま

れるようなことはしないだろう。つまり、ふたりは関係ない。

男もそれを理解し、怪訝そうな顔ではあるが手紙を持った腕を下

げ、彼も安心したその時だ。

「そうだそうだ! 僕たちは関係ない!」

「ちよつとお婆ちゃんに親切しただけで、手紙の内容なんて知らな

かつたんだ!」

彼の前に現れて、男に文句を言い始めてしまうふたりに、男は一度はなくなつた眉間のしわがまた戻り始め、彼も慌てたようにふたりの肩に手をやった。

「君たち。疑つて悪かつた。さ、もう帰りなさい」

「そんな! “先輩”は悪くないです!」

「そうです！ 悪いのはこの人です！ “先輩” じゃありません！」
ふたりが空気が氷ついたのを感じたのは、少し時間が経ってからだった。

そして、気がついたのも、目の前で表情を強ばらせた、忍術学園の先輩である立花の表情のおかげだった。

「“先輩” だと？ 妙に庇うと思ったが……貴様ら、やはり繋がっていたのか……!!」

「しまった……!」

「曲者だ！ 曲者だ!!」

立花もすぐにしんべエと喜三太を自分の後ろにやるが、ここは庭。場所が悪い。

仕方ないと、懐へ手をやった時だ。

「曲者だ?!」

一番初めに来た男は、曲者だと騒ぐ男に駆け寄ると、立花たちに目をやる。

「!」

男と目が合うと、手を使わずしんべエと喜三太を後ろに押しやる。続々と集まってきた人。

裾を掴まれる感覚がするが、立花は静かに刀を抜いた。

「刀を抜いたな……? みな——」

「こいつが曲者だ！ 捕まえるのを手伝ってくれ！」

その声は真後ろから聞こえてきて、振り返れば最初に来た男が自分を指さして曲者だと周りに叫んでいた。

「な、何を言っている!?! 曲者は——」

「この子供たちが教えてくれたんだ！ この屋敷の襲撃に手引きしている人がいると！ 手紙に名が書かれていると！」

周りに演説する男の手には、先程まで自分が持っていたはずの手紙。

「貴様も仲間か……!?!」

「自分の悪事がバレると知って、子供を狙うとは！ 許せん！」

「ち、ちが……! そっちこそ！」

立花の言葉に、男は周りを見るが既に自分を見る目は、敵を見る目と同じだった。

「え？ どういうこと？」

「よ、よくわかんない……」

だが、さすがに今の状況で何も言っではいけない空気は感じたらしく、しんべエも喜三太も何も言わずに立花の後ろに隠れていた。

縄に縛られていく男を見ていると、先程演説していた男が、ふたりの肩を叩く。

「さあ、君たち。ここから先は俺たちの仕事だから、子供は帰るんだ」
門の外まで連れていけば、ふたりはもう一度心配そうに、屋敷の中へ目をやると、男はふたりと視線を合わせるように屈む。

「仙蔵なら大丈夫だし、お婆さんももう店にはいない。だから、ふたりは大人しく帰ること。いいね？」

小声でそういうと、ウインクをした。

そこに来てようやくふたりは目を合わせると、同時に自分の手で口を押さえると頷いた。

「本当にあいつらと関わるといいことがない……今回は助かったぞ。青葉」

変装を解いて、疲れたようにため息をつきながら、隣を歩く青葉へ目をやる。

今回の実習の課題は、青葉と組んで行なっていた。仙蔵が屋敷へ潜り込み内部を調べ、青葉が町で調べる。

「いえいえ。アンラッキーズ（仙蔵専用）を見つけた時は、さすがに仙ちゃんのところには行かないよなあ？ とか様子見てたら、ドンピシャなんだもん。さすがにビビる」

「それで速かったのか」

町の中で見かけていたからこそ、後をつけ、すぐに助けに入れた。「というか、会話した」

喜三太は気づいていないようだったが。

「さすがに、忍者に使われそうになつてのを放っておくのは……」

「やはりアレは別の城からの妨害か。もしかしたら、青葉が仕掛けたのかと思ったぞ」

「まさか！ 今回の課題は、あの屋敷にいる内通者を暴けだよ？ 仙ちゃんも難航してるならやるけど。ところで、優秀ない組さん。内通者はわかったんだよね？」

「ああ。捕まったがな」

「……どおりで、ピリピリしてたわけだ」

手紙ひとつで動揺して、子供を疑ってしまうほどの人物など、よほど余裕がない悪事を働いている人間くらいだろう。

ふたりは無事終わった課題に安心していると、忍術学園の門の前に立っている小さなふたつの影。

「アンラッキーズのお出迎えみたいだけど」

「……まあ、今はいいさ」

手を振るふたりに、ふたりは手を振り返した。

要は言葉の使いようの段

雷蔵、三郎、八左エ門は、目の前に並ぶそれらをじっと見つめる以外に、何もできなかつた。

それを、乱太郎、きり丸、しんべエも泣きそうな顔で見るとは。

「ブロマイドに」

「人形が」

「こんなにたくさん」

目の前に並んでいるのは、忍術学園学園長のブロマイドに人形だ。

前にブロマイドを売るのを手伝ったことがあるが、また随分と溜まってしまったらしい。しかも、今回は人形までついている。

「僕たち、前にブロマイドをもらってくれたおじいさんを探したんですけど、見つからなくて……」

「それに、この人形……」

「前に、喜八郎が埋めていたのは見たことがあるが……」

おそらく同じものが大量に埋まっているだろう。

「埋めるの、手伝うか？」

八左エ門の意見が一番手っ取り早くて早いかもしれない。雷蔵と

三郎も頷いた。

「ブロマイドは、あのおじいさんを僕たちも一緒に探してあげるよ」

「ああ。任せておけ」

言うが早いのか、三郎は前のおじいさんに変装している。これなら見つけるのも簡単だろう。

早速、六人はおじいさんを探しつつ、埋める場所へ向かおうとすれば、団子屋の前で見知った顔が座っていた。

「あ、伊作先輩！」

「やあ。乱太郎」

「よお。珍しいメンバーだな」

座っていたのは、伊作に留三郎、青葉の六年は組のメンバー。

ちようどいいと、大量のブロマイドと人形のことを相談すれば、三人共、全員が一度は通った表情をした。

「そういえば、学級委員長委員会でも結構ブロマイド、もらいますよね？ あれってどうしてるんですか？」

学級委員長委員会では、学園長から在庫処分やお駄賃としてブロマイドが渡されることが多い。

だが、不思議なことに溜まっていつている様子はない。おそらく、青葉が処理しているのだろう。

「ひ・み・つ」

ウインクをしながら口元に人差し指を添えれば、両脇腹に突き刺さる拳。

「教えてやれよ」

「そうだよ」

「は、はい……正直に申し上げます。焼き芋、生き物の巢、襖の修理の下地、保健室の薬包紙、トイレの紙、少量なら学園長先生の所にそつと戻してます」

「じゃあ、私たちのも」

「さすがに量が……」

学園内で使おうとすると、どうしてもバレる危険がある。既に数回バレたが、その時は全力でごまかし、事なきを得ていた。

乱太郎たちの持つ大量のブロマイドに人形を使えば、自然とバレる危険は高くなる。

また無理だと断られたせいか、三人の目に涙が溜まり始め、さすがの青葉も表情をひきつらせた。哀車の術だとは分かっている、後輩であることに変わらない。

「……」

「いいじゃないか。用具委員会でも少引取ってやるぞ」

「保険委員会でも薬包紙ならよく使うからさ」

「………わかった！ わかったよ。できるだけ町で売り切つてやる」

「え!? 売れるんすか!？」

「少し手間はかかるけど、これだけ人がいるんだ」

全員に目をやれば、全員すぐに頷いた。

「じゃあ、とりあえず、その人形を分解してくれ。顔のパーツはそのままで。きり丸。この町にふすまや張子を作っているお店はある?」

「あ、それなら前にバイトした場所なら知ってますよ」

「よし。じゃあ、そこにブロマイドを売り込みに行くから、そっちはよろしく」

「おう」

きり丸と共に襖を扱う店に行けば、きり丸が驚いたように声を上げた。そして、青葉もその見覚えのある顔に首をかしげた。

「三郎が変装してた、おじいさん?」

「あ、前の!」

「あれ? この前の……」

「また小さな紙、もらってくれませんか!」

「ああ……なんだ。ちょうどよかった。前の分がそろそろなくなりそうだね」

どうやら知り合いらしく、青葉が交渉するまでもなかった。ブロマイドを全て売って、元の店に戻れば、ほとんど分解された人形。

「それで、この小さな布はどうするの?」

「当て布として売る。おばちゃん狙いでね。きりちゃんはこういうの得意でしょ?」

「はい! 任せてください」

「じゃあ、そっちはきり丸たちに任せて」

「あとはこっちか……」

留三郎が持ち出したのは、顔のパーツ。目や鼻、口といった特徴的なものが多く、当て布にするには小さすぎる。

「それは、若い子を狙って人形のパーツとして売るんだよ。三郎。若い女性に変装して売り子、できるか?」

「もちろん」

さっと変装し直した三郎に、顔のパーツがひとまとめになったものを渡す。

「それで、残り全員で風の術だ。このパーツを買えば、人形が簡単に作れるってな」

「でも、売れるのか？ 顔のパーツだけだろ？」

「大丈夫。女の子は、恋と占いが好きだから」

にたりと笑った青葉は、まだ理解しきっていない留三郎の肩をつかむと、今まで以上の笑顔を見せた。

「全員女装な」

「は……？」

「じよ・そ・う」

「……」

「留子ちゃん♪」

「……お前、それが目的だろおおお!!」

男が人形のパーツを売っているなんて可笑しな話があるか。と、ムダに正しいことを言われては留三郎も強くはでられなかった。

たとえば、明らかに上級生を女装させることが目的だったとしても。

「留子ちゃん！ 聞いてよ！ 私……私、ついに、買っちゃったの!!」

本人も女装をしているのだから、見逃す他、ない。

「ほら、好きな子の髪の毛を入れて、人形作ると結ばれるって噂あったでしょ？」

向こうで、人形を簡単に作れるってセットが売ってたから……!!」

「へえ……!! そうなの……!!」

「お店の人が言うには、いくつか種類があつてウイंकしてるのが混じってるんだって。それが出たら幸せになれるって南蛮の占いなんだって。だから、いさつくんに作ってあげようかなって……!!」

と、留子ちゃんも一緒に作らない？」

「た、楽しそうね！ いいわよ！」

あつちだよ。なんて、小走りに連れて行かれ、頃合を見て隠れた。

乱太郎たちも無事、全て売り終え、三郎の元へへ行けば、ちようど売り終えたところだった。

「本当に売れちゃったんですか？」

「ああ。ほら、これが売上」

「まいどー!!!」

「でも、いいんですか？ 私たちが全部もらっちゃって」

「私たちは手伝うっていったし、先輩たちもいってき。というか、青葉さんの場合、明らかに食満先輩と八左エ門の女装見て笑いたかっただけだろうし……」

三郎の言うとおり、ふたりの女装を見て、腹を抱えて笑っていた青葉だった。